

第2回 須坂市小中学校の適正規模等を考えるシンポジウム【会議録】

○日時 2023年2月19日14:00～15:30

○場所 旧上高井郡役所2階多目的ホール1

○出席者

コーディネーター：荒井英治郎副会長

シンポジスト：本多健一委員、新野健委員、中沢裕子委員、垂澤優樹委員

○参加者（一般）

会場：36人、オンライン：10人 計46人

1. 開会

2. あいさつ

教育長：

- 市教育委員会では、少子化の中で教育はどうあったらよいかということを経年間かけて「学びのあり方の検討会議」を開いて検討した。その提言を受けて、教育委員会として「新しい学びを実現する学校」という形にまとめた。
- その新しい学びには、大きく8つの視点がある。園小の接続による非認知能力の育成や小中学校9年間を見通したカリキュラム編、特別支援教育の充実など。
- この新しい学びの形を実現するためには、どのような学校の形が必要かということを検討するために今年度この審議会を設置した。
- 審議会の様子や委員の意見を聞きながら、市民の皆さんにも様々な意見を出していただき一緒に考えて参りたい。

3. これまでの議論の振り返り

荒井コーディネーター：

- 須坂市小中学校適正規模等審議会は今年度6回の議会を開催。この間、市内の小中学校の視察を実施。また、市民や教職員、保護者等に対してアンケートを実施し可能な限り多くの方々の意見をデータとして整理した。
- 学校における人口減少の影響、先生方の配置の課題、子供たちの教育の活動における多様性の問題等、様々なものを総合的に判断して、須坂市が2年間かけてま

とめた新しい時代の学びを実現するために、今年度審議会では学校再編という方向を決定した。

- この再編の方向で、本日いただいたご意見も踏まえて次年度の審議に活かしていく。

4. 市民・保護者・教職員・児童生徒アンケートの結果報告

学校教育課長：

- 回答者の年齢層は、市民アンケートでは60代以上の方が多く、保護者では40代～30代、教職員では50代の方が一番多い結果となった。
- 小学校の1学年あたりの学級数では、市民、保護者、教職員、児童のすべてのアンケートで「2～3学級がよい」との回答がもっとも多い。
- 中学校の1学年あたりの学級数でも、すべての調査で6割以上の方が「4から6学級がよい」と回答。
- 小学校1学級当たりの人数は、どのアンケートでも「30人以下が適当」との回答がもっとも多い。教職員では7割を超えている。
- 学校で取り組む課題の優先度は、「子どもの安全安心の確保」が市民と保護者では1番目に多く、教職員では2番目に多い。
- 「学力の向上」については、市民と保護者では2番目に多く、教職員では1番目に多い。教職員では3番目に「特別支援教育の充実」が多い。
- 小学生では「子供の安心安全」が1番目に多く、2番目が「いじめ対策」。中学生は「学力の向上」が1番目、2番目に「いじめ対策」。
- 子供たちに安全に育みたい能力では、市民、保護者、教職員のすべてで「他者を思いやることができる心」が1番目に多い。
- 小中学生は「基本的な知識」が1番目に多い。2番目は、小学生は「他者を思いやることができる心」、中学生は「自分の思いや考えを主張できる表現力」。
- 学校への人材配置の優先度は
- 学校数・配置に対する考え方では「今の学校数が望ましいが、学校再編を進めるやむを得ない」が1番目に多く、2番目に「須坂市全体を対象として計画的に学校再編を進めるべき」。どのアンケートでも学校再編に肯定的な回答が7割を超えている。

- 今後さらに児童生徒数も減少しても現在の学校数が望ましいと回答した方の理由では「学校や地域の活動拠点なので」が3割を超えて1番目に多い。

5. これまでの議論やアンケート結果を受けて意見交換

荒井コーディネーター：

- これまでの審議会や今回のアンケート結果を踏まえて感じたこと、これから課題等についてパネリストからお話しいただく。

パネリスト垂澤委員：

- 本審議会の前段として2年間、望ましい子どもたちの学びのあり方について議論してきた。そして、教育委員会で示した「新しい学びを実現する学校」の中に「園小接続による非認知能力の育成の具体化」が挙げられている。
- 非認知能力というのは「心情・意欲・態度」という言葉に表される学びに向かう力。最後まで諦めない、友達と協力しながら頑張る、友達を応援するといったペーパーテストで測ることができない力で、これは幼児から育ち始める。
- 今回のアンケートで、子どもたちに育みたい能力としてどの結果でも共通して「他者を思いやることができる力」「自分の思いや考えを主張できる力」「学びを人生や社会に生かそうとする力」が上位を占めている。これらの力は、小学校からではなく幼児期の育ちの中から育まれる。
- 幼稚園や保育園は子ども初めて出会う社会の縮図。その中で遊びを中心に友達や先生と関わり、非認知能力が大きく育つ時期です。主体的、自発的な子供の遊びを通して好奇心や探究心が培われる。それがやがて、小学校以降の自ら主体的に学ぶ力に繋がっていく。
- 須坂市では園小連携推進会議に私立の幼稚園や保育園も加わり、公私の枠を超えて情報共有を図っている。
- 園小の接続は、言葉では簡単だが、実はとても難しいものです。なぜなら、幼児教育は見えない教育と言われ、ペーパーテストや通知表もないため、育ちが具体化しづらい。だからこそ、幼児期に育ってきた力を小学校と園が共有し、願う子供の姿を語り合い、連携を強化する必要がある。
- 今後再編の検討していくうえでは、子供の育ちのあり方をないがしろにしてはならない。

パネリスト中沢委員：

- これからの学校のあり方を考えるうえで、アンケートの中で子どもたちに育みたい能力として市民、保護者、教職員が非常に大事だと考えていることは「他者を思いやる心」、2番目に「自分の思いや考えを表現できる力」。子どもたちが社会に出たときに、多様な人と働く中ではそうした力が必要だと考えている。
- 新学習指導要領の改訂に込められた願いには「社会が、どんなに変化して予測困難な時代になっても、自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、判断して行動し、それぞれに思い描く幸せを実現してほしい」とある。須坂市で示した「新しい時代の学びを実現する学校」は、この願い実現するために具体的な取り組みを示している。
- 私はこの「新しい時代の学びを実現する学校」を作っていくということが学校再編を考える上で大切だと思う。
- そう考えると、アンケート結果で多数を占める、クラス替えができる1学年3学級程度の規模、また1学級30人程度の学級集団という結果は納得ができる。
- いろいろな人と関わりを持てる規模の集団。異年齢の集団の中で多くの人と関わりながら多様性に触れる。そして、学校にいる段階から地域の方や地域社会と関わりを持ち、1人1人が自分の良さ自覚しながら、個々のペースでも学びを保障されながら成長できる教育環境を実現できたらよい。
- 多様な個性を持つ子供たちもの多様なニーズに対応することも学校現場では大切に考えている。そのためにも、義務教育学校や小中一貫校のような特色をもつ学校の設立も視野に入れて、9年間を見通した連続性のある教育活動ができる学校を選択できる、そんな柔軟な取り組みによって魅力ある学校作りを考える必要がある。
- 1学級の人数は「30人以下が適当」がもっとも多いアンケート結果だが、国の基準では、小学校の35人学級の実現は令和7年度。現在、長野県独自の対応で35人学級が実現している。
- 教職員アンケートでは、「35人以下が適当」と考えている割合が2%しかいない。教職員の多忙な現実を踏まえて、一人ひとりに手が入る適正な学習規模を考えて行くことも必要だと考える。

パネリスト新野委員：

- 今回のアンケート結果は、これまでの当審議会における議論の範囲内にある、もしくは延長線上にあるアンケート結果であったのではないかと感じている。端的に言えば、学校では基礎学力を付けて、他者を思いやり、社会の一員としてやっていける忍耐力を身に付けて欲しいと願っている。30年前も20年後もこの願いは変わらないのではないか。
- ただ学校の概況は厳しい状況にある。国の基準では、学級数に応じて教員数が配置される。この現実はずぐには変えられない。学級数が減ると教員が減り、学校運営に支障が出てくる。例えば、東中学校でも専科教員を確保するために大変苦労している状況がある。
- 教育委員会として示した「新しい学びを実現する学校」を実現するためには、現在の学級数では難しい。クラス替えが可能で、教員が不足することなく児童生徒、保護者、教職員が安心できる教育環境を整えるために学校再編という方向がよいと考えた。

パネリスト本多委員：

- 審議会の議論や視察等を通じて、少子化の速度、規模の大きさが、思いのほか早く大規模だと感じている。新しい学校のあり方を考えなければならない切実な状況。
- 学校再編についてアンケートでは、大方は賛成だが、一番多いのは「やむをえず」再編ということだと思う。したがって、その心情はしっかりと受け止めながら、折角やるなら、これからの児童生徒のためにより良い教育環境を力を合わせて作っていくという我々の気概が大事なる。
- より良い教育環境はどのような環境かと言えば、アンケート結果にあるように「他の人とうまく付き合っていく力」「様々な個性の子供たちと触れ合うこと」「他者を思いやることができること」「社会性や協調性」「困難に負けずたくましく生きる力」等を育むことができる環境である。そして、それらは全て集団の中でこそ育まれる力であると考え、多様な価値観が渦巻いて、それらがぶつかり合うような一定数の人数が必要。

- 一方で、「生徒一人一人に目が行き届き丁寧な指導」「子どもの安心安全を守ること」を求める保護者、児童生徒および教員が一定数いることから、ただ一概に人数が多ければいいということではない。「丁寧な指導、児童生徒の安心安全」と「多様性」が共に担保される人数を考える必要がある。それがまさに適正規模である。
- その適正規模はアンケート結果から、小学校は「1学年2～3学級、1学級21人以上30人以下」、中学校は「1学年4～6学級、1学級21人以上、35人以下」である。
- 人間の成長過程を考えるに、成長に応じた集団の大きさがある。小学校の低学年は1学級15人くらい、中学年は20人、高学年は30人規模というように段階的に集団規模に変化があってもよい。
- ただし、学校再編は数字合わせになってはいけない。新しい学校のあり方を考えるうえでは哲学、理念が大切。学校は社会の縮図である。なぜなら、学校は社会に出る前の鍛錬の場である。
- 社会は多様性に満ちている。学校は色々な友だち、先生、保護者、外国籍の方、LGBT、健常者、障がい者など多様な価値観が渦巻いた環境であるべき。そのような中で子ども達が鍛えられ、社会へ出て行くことができる。
- 学校再編に向けて、色々考えなければならないことはあるが、基本的な理念の元にしっかりと腰を据えて優先順位を考えて、これからの学校のあり方を考えていく必要がある。

6. 市民の参加者を含めた意見交換

参加者A：

- 3年間審議会を傍聴しています。最初の2年間は子どもの姿から、子どもに沿った討論がされていた。
- コロナ禍において、学校が一斉休校になったり、分散登校を余儀なくされたりして、保護者や先生方も大変だったと思う。ただ、その状況下での保育、教育については、少人数だから困るというような否定的な評価があまりなかったと感じている。子供の姿がよく見える、子供による寄り添って行事ができた、そういう前向きな評価が多かったと思う。少人数学級というものを普段では決してできない社会的な実験をしたとも言える。

- 今年度になって審議会の討議の内容が変わってしまった。子供の姿が語られることがなく、大人の都合、教育行政の都合が語られている。今の教育行政の中で、クラスを増やさなければ教員が減らされてしまう、そういうことに縛られている。
- ところがそうではなくて、長野県は全国に先駆けて、35人学級を実現しました。決して長野県の財政が豊かだったからということではない。それと同じように全国でも、長野県内でも市町村独自に教員を採用して、小規模学校を維持しているところがある。そういうところがどうしてそうしているのかっていうことをぜひ知りたい。
- また、今回のアンケートは乱暴なアンケートだったと思う。アンケートの対象になった人たちに今こういう時代でどうなっているということがないまま、アンケートされると普通だったら、今自分の身近な環境とかで、ここが適当かなという形で丸をしてしまう。私だったらそうですので、こういう結果になる、予想された結果になったと思う。
- 日本で一番問題なのは、大学教育まで子供たちが世界に行ったときに自分を主張できない。自分の意見を持って発言できない。それはなぜなのか、それが一番の教育の問題だと感じる。
- 世界的に見れば小さな学校、小さなクラスが世界の流れです。外国の初等教育は学校規模100人から200人。1学年1学級でクラス替えがないのが一般的だそうです。
- アメリカでは過去に無理な統廃合で、学校規模が拡大し学校の荒廃が広がったことから、現在は小さな学校運営が見直されているそうです。
- 2月16日の信毎の記事によると、2021年の20歳未満の自殺者が県内は16人。人口10万人あたりの自殺率は4.80人で、全国平均3.74より多い。直近10年は全国平均より高く推移している。17年から21年の5年平均では福島県に次いで長野県がワースト2。こういう状態をしっかりと考えなきゃいけないと思う。今、日本でやっている学校教育がこういう事態引き起こしていると言えると思う。
- 統廃合をせずに小さな学校で残った学校や、統廃合をして大きな学校に一つになった学校の地域の人や子どもたちが本当にそれでよかったと思っているのか。そうした統廃合の事例も調査しながら、それを受けて検討していただきたい。

参加者B：

- 私はPTA関係で学校に関わったことがあり、その時一番感じたのは、子どもの異学年集団での学びの関係で、地域の行事をやるときに、同じ学年同士でしか協力ができない。5・6年生に下の子を見なさいと言っても、それができない。
- さらに5・6年生はスポーツクラブ等に入っていて、土日は地域の行事に参加できない。そうすると、行事の準備を大人中心で進めることになり、子ども達が自分でセッティングできない。結局、言われたことしかできない子どもになってしまう。
- 地域と学校がきちっとした取り組みをやらないと、学校だけでは無理だと感じる。地域と学校をいかに結び付けるかということは、地域の子ども会活動をもっと充実した中で、子供社会を卒業して、大人社会に入るという自然なサイクルが大切。だから学校の位置ってことですね。

参加者C：

- 一人一人に配布されたICTタブレットは、より良いこともあるが、これが学校現場を忙しくしていと感じる。ICTが個別最適な学びを保障できるのか心配している。
- ICTの活用は、教育委員会が強制しないで、先生が決めるようにしてもらいたい。

参加者D：

- 市内の小学校で教員をやっています。
- 学校の大きい小さい、クラスの人数が多い少ないというのは自分の意見としてはあまり関係ない。やはりそこに場にいる教員の資質や子供たちとの関係作りが非常に大事だと考えている。
- 少子化の中で統廃合もやっていくのは賛成。しかし、例えば2つの学校を1つにして2クラス3クラスにしたからといって、「新しい時代の学びを実現する学校」が実現できるとは思えない。
- なぜかという、文科省の規定による教員配置の中で、学校は今色々なことが入ってきて本当に忙しい状況にある。
- 教員というのは、子ども達が1つの授業が終わった後に何か自分のためになったり、今までと全然違う景色が見えたり、そういうことを目指して子供たちの前に立っている。

- しかし、民間の方もそうだと思うが、顧客というかそういう形からの猛烈なプレッシャーや批判が今非常に多い時代。学校でいうと保護者。どうしても子どもに中心に置きたい気持ちがある中で、保護者にとってベターな問題を起こさない、授業やそういった生活を目指すことに力が置かれるようになっている。
- 教員1人1人でやりたいことがいっぱいある中で、それを抑えながら窮屈な中で、何が平等かを教員一人一人が考えながらやっているが、それを批判されたり責められたりすると、なかなか次の授業だったり、生活がままならないのが今の学校の実態。
- 私も毎日、子ども達と今日も楽しかったねって言われることを目指しているが、やはりとにかく忙しく、ストレスや負担感を感じている。
- 子供に重心を置くというところから学校も少し離れているようなところがある。
- 自分は非常にこういったことを目指して、自分でできるところからやっているが、厳しい現実があるということをお伝えしたい。

参加者E：

- 学校再編の話の中で、地域の活性化とか子どもを増やしていくビジョンをどう描くか。そのときに地域作りの中における学校の役割、重要性についてもしっかり審議していただきたい。
- 2点目は、再編の方法として全国的にも長野県内でも利用されている小中学校を合わせた義務教育学校や小中一貫校等があるが、本当にその形が子供の育ちを豊かに実現できるのか問題を感じている。
- したがって、今までの意見出てきたような統廃合が行われた地域や義務教育学校や小中一貫校が作られた学校でも様々な課題や問題点が指摘されている。いい所ばかりではなく、そういうことも踏まえて審議を進めていただきたいと思う。
- 最後に、アンケート結果の自由記述の中にとっても大切な意見や重要な点があるので、ぜひそれもう見て参考にしていきたい。
- また、私は審議会も傍聴していますが、委員の保護者や区長さん方からも色々な意見も出ていますので、その意見も大事にしてこれらの審議を進めていただきたい。

参加者F：

- 市内の小学校で教員をやっています。
- 今日お話を聞いて、地域の方のお考えを聞いてもっともだなと思った。小規模は小規模なりの良さがあり、そうした所を大事にしたいという考えは良くわかる。
- ただ、日頃私が子供たちに関わっている中で、少ない人数の中で、限られた人間関係の中で、輝ける子もいるが、その固定化された関係の中から抜け出せない難しい子はどうしてもいる。
- そのような中で、ある程度色々な子たちと関わる中で、その子にとっての安らぎの場みたいな場が持てる環境があるといいなと思う。そういう意味で、やはり人数がある程度増えることは、子供にとっての良さはある。
- また、教員の立場としては、政治的に教員がたくさん配置されれば、一番話が早いですが、どうしてもそれが難しい。
- 日頃、子供たちが何かトラブルがあった時に、じっくり話を聞きたいと思っても、それぞれの子から話を聞いていると、その間、学級の他の子供たちがほったらかしになってしまう。それを代わってくれる手が空いている教員もない。そうするとその子供たちにきめ細かな対応をするのが難しい、さあどうするというジレンマを日頃抱えている。
- 私は日頃、自分はこれがベストだと思うことをやってはいるけれども、学級の子供たちにとって、私だけの世界がいいのだろうかと思うこともある。
- 例えば、1学年に2クラス、3クラスあり、担任が入れ替わってやってみたところ、それによって違う先生の授業を受けて、子供たちも発見があるし、教員も他のクラスで授業をやってみて新たな関わりや気づきがあり、それをまた自分のプラスに生かすという幅の広がりがあった。そういう選択の幅が広がるという良さはあると思う。
- 今、本当に危機感を持っていて、このままではこの先、教員も疲弊して、子供たちもどんどん窮屈になっていく。そのためには今できる手を打っていくしかないと思うので、新しい取り組みを探っていくことはすごくいいことだと思っている。

参加者G：

- 市内の小学校で教員をやっています。

- 須坂市でこのような会が立ち上がったことはすごいなと思っている。このチャンスはどう生かしていくか、一緒に考えたいなと思っている。
- せっかく新しい学校を考えるのであれば、ダイナミックに今までの形にとらわれたい、パラダイムを大きく変換するようなものが欲しい。
- 1つは須坂市で私たち大人が、子供たちの10年後20年後、どんな力が付いていたら本当に社会で自分らしく生きていけるか、その力を上位目標として、しっかり皆で共有していく必要があると感じる。
- パネリストの園長先生と学校の校長先生のお話聞いた中でも、やはり学力の捉え方が全然違うと思った。園では、非認知能力だとか学びに向かう姿勢ということを大事にされているけども、学校になると学力、見える学力になってしまう。そこのずれているところに調節の難しさがある。
- したがって、どういうふう子供たちになってほしいのかということ、大人が本気で議論することで、先行き見えない時代だからこそ、こういう力は絶対必要だよねというものをしっかり見据えた上で考えていくということが大事。
- 適正規模等を考える中で、そもそも学年学級というもので子供たちを区切っているのかどうかという問題がある。熊本大学の苦野准教授は、学年学級制が実は全ての教育問題の原因であると言っている。いじめ、不登校、落ちこぼれ、特別支援が必要な子供たちの増大等、そういったものは同じ年齢の子たちを同じ部屋に詰め込んで、同じ学習内容を教えることによって生まれてくる問題ではないのか。そうだとしたら、学年学級制というものをもう1回見つめ直して、もっと異学年での交流や小学1年生が3年生の勉強をしてもいいし、6年生が高校の物理の勉強をしてもよい、そのような学年学級にとらわれない、ダイナミックな教育活動というものが、もしかしたら色々な教育問題を解決していく糸口になると感じている。
- それは物理的に難しいよという意見があるかもしれないが、しかし折角このようなシンポジウムが立ち上がったのであれば、ダイナミックな意見を考えてもよいのではないかと思う。

7 閉会